

LIBER STUDIORUM

寺田寅彦

青空文庫

震災後復興の第一歩として行なわれた浅草凌雲閣あさくさりょううんかくの爆破を見物に行つた。工兵が

数人かかつて塔のねもとにコツコツ穴をうがっていた。その穴に爆薬を仕掛けて一度に倒壊させるのであつたが、倒れる方向を定めるために、その倒そうとする方向の側面に穴の数を多くしていた。準備が整つて予定の時刻が迫ると、見物人らは一定の距離に画した非常線の外まで退去を命ぜられたので、自分らも花屋敷はなやしきの鉄檻てつおりの裏手の焼け跡へ行つて、合図のラツパの鳴るのを待つていた。その時、一匹の小さな犬がトボトボと、人間には許されぬ警戒線を越えて、今にも倒壊する塔のほうへ、そんなことも知らずにうそうそひもじそうに焼け跡の土をかきながら近寄つて行くのが見えた。

ぱつと塔のねもとからまつかな雲が八方にほとばしりわき上がったと思うと、塔の十二階は三四片に折れ曲がつた折れ線になり、次の瞬間には粉々にもみ砕かれたようになって、そうして目に見えぬ漏斗から紅殻色べんがらいろの灰でも落とすようにずるずると直下に堆積たいせきした。ステッキを倒すように倒れるものと皆そう考えていたのであつた。

塔の一方の壁がサーベルを立てたような形になってくずれ残ったのを、もう一度の弱い爆発できれいにもみ砕いてしまった。

爆破という言葉はどうしてもあのこわれ方にはふさわしくない。今まで堅い岩でできていたものが、突然土か灰か落雁らくがんのようなものになつてそのままでするとたれ落ちたとは思われない。それでもねもとのダイナマイトの付近だけはたしかに爆裂するので、二三百メートルの距離までも豌豆えんどうだい大の煉瓦れんがの破片が一つ二つ飛んで来て石垣いしがきにぶつかったのを見た。

爆破の瞬間に四方にはい出したあのまっかな雲は実に珍しいながめであつた。紅毛の唐か獅子らうしが百匹も一度におどり出すようであつた。

くずれ終わると見物人は一度に押し寄せたが、酔狂な二三の人たちは先を争つて碎けた煉瓦の山の頂上へ駆け上がった。中にはバンザイと叫んだのもいたように記憶する。明治煉瓦時代の最後の守りのように踏みとどまっていた巨人が立ち腹を切つて倒れた、その後に来るものは鉄筋コンクリートの時代であり、ジャズ、トーキー、プロ文学の時代である。

あの時に塔のほうへ近づいて行つたあの小犬はどうしたか。当時を思い出すたびに考え

てみるのだが、これはだれに聞いても到底わかりそうもない。

こんな哀れな存在もあるのである。

二

ある日乗り合わせた丸の内の電車^{まるのうち}で、向かい側に腰をかけた中年の男女二人連れがあつた。男は洋服を着た魚屋^{さかなや}さんともいった風体^{ふうてい}であり、女はその近所の八百屋^{やおや}のおかみさんとも思われる人がらであつた。しかるに二人の話し合っている姿態から顔の表情に至つては全く日本人離れがしている。周囲のおおぜいの乗客はたつた今墓場から出て来たような表情であるのに、この二人だけは実に生き生きとしてさも愉快そうに応答している。それが夫婦でもなくもちろん情人でもなく、きわめて平凡なるビジネスだけの関係らしく見えていて、そうしてそれがアメリカの魚屋さんとアメリカの八百屋^{やおや}さんのように見えるのが不思議である。

二人ともにあるいは昔からの活動写真、近ごろの発声映画のファンでもあるかとも考えてみた。そうとでも仮定しなければ他に説明のしかたのないほどに、あく抜けのしたヤ

ンキータイプを見せていた。

喫茶店^{きつさてん}などで見受ける若い男女に活動仕込みの表情姿態を見るのは怪しむまでもないが、これが四十前後の堅気な男女にまで波及して来たのだとすると、これはかなり容易ならぬ事かもしれない。

天平^{てんぴやうじだい}時代の日本の都の男女はやはりこういうふうにして唐^{とう}や新羅^{しらぎ}のタイプに化して行つたのかもしれない。

三

書店の二階の食堂で昼飯を食いながら、窓ガラス越しに秋晴れの空をながめていた。遠くの大きな銀行ビルディングの屋上に若い男が二人、昼休みと見えてブラブラしている。その一人はワイシャツ一つになって体操を試みたり、駆け足のまねを試みたり、ピッチャーの様子をしたりしている。もう一人は悠然^{ゆうぜん}としてズボンのかくしに手を入れ空を仰いで長^{ちやうしやう}嘯漫歩^{しやうまんぷ}しているふぜいである。空はまっさおに、ビルディングの壁面はあたたかい黄土色に輝いている。

こういう光景は十年前にはおそらく見られないものであつたろう。この二人はやはり時代を代表している。

ジャズのはやるゆえんである。

四

一週に一度永代橋えいたいばしを渡つて往復する。橋の中ほどから西寄りの所で電車の座席から西北を見ると、河岸かしに迫つて無骨な巖がんじょう丈な倉庫がそびえて、その上からこの重い橋をつるした鉄の帯がゆるやかな曲線を描いてたれ下がっている。この景色がまたなく美しい。線の細かい広重ひろしげの隅田川すみだがわはもう消えてしまった代わりに、鉄とコンクリートの新しい隅田川が出現した。そうしてそれが昔とはちがった新しい美しさを見せているのである。少し霧のかかった日はいつそう美しい。

邦楽座ほうがくざわきの橋の上から数寄屋橋すきやばしのほうを、晴れた日暮れ少し前の光線で見た景色もかなりに美しいものの一つである。川の兩岸に錯雑した建物のコンクリートの面に夕日の当たった部分は実にあたたかいよい色をしているし、日陰の部分はコバルトから紫まであ

らゆる段階の色彩の変化を見せている。それにちりばめた宝石のように白熱燈や紅青紫のネオン燈がとり始める。

白木屋で七階食堂の西向きの窓から^{しろきや}大手町のほうをながめた朝の景色も珍しい。水平に一線を画した高架線路の上を省線電車が走り、時に機関車がまっ白な蒸気を吐いて通る。それと直交し弓なりに立つて見える呉服橋^{ごふくばし}通りの道路を、緑色の電車のほかに、白、赤、青、緑のバスが奇妙な^{コレオブテラ}甲虫のようにはい上りはいおり行きちがつている。遠くにはお城の角^{すみやぐら}櫓が見え、その向こうには大内山の木立ちが地平線を柔らかにぼかしている。左のほうには小豆色^{あずきいろ}の東京駅が横たわり、そのはずれに^{こがねいろ}黄金色の富士が見える。その二つの中間には新議会の塔がそびえている。昔はなかったながめである。百年前に眠ったままで眠り通し、そうして今この窓で目ざめたとしたら……。いつもこんなことを考えながら一杯のコーヒーをすするのである。

震災前の東京は、高い所から見おろすと、ただ一面に鈍い鉛のような灰色の屋根の海であつた。それが、震災後はいつたにあなたかい明るい愉快な色の調子が勝つて来た。それと同時にそういう所で仰ぎ見る空の色が以前よりも深く青く見えだしたような気がする。これはコントラストのせいであろう。これほど著しい色彩の変化が都人の心に何かの影響

を及ぼさないはずはないという気がする。

実際は東京の空気は年々に濁るはずである。自動車のガソリンの煙だけでも霧の凝縮核を供給することはたいしたものであろう。寒い曇天無風の夜九段坂^{くだんざかうえ}上から下町を見るといわゆるロンドンフオッグを思わせるものがある。これも市民のモラルを支配しないわけにはゆかないであろう。

五

上野^{うえの}のデパートメントストアの前を通ったら広小路^{ひろこうじ}側の舗道に幕を張り回して、中人形が動いていた。周囲に往来の人だかりのするのを巡査が制していた。なんとなく直感的にその幕の中には人が死んでいそうな気がしたが、夕刊を見るとやっぱり飛び降り自殺であった。あまり珍しくないそれであった。

それから数日後にまた同じ屋上庭園から今度は少しばかり前とちがって建物の反対側へ飛んだ女があった。そうして庭園はついに閉鎖された。

また数日たって某大学の構内を通ったら壮麗な図書館の屋上に立ってただ一人玄関前の

噴水池を見おろしている人がある。学生であるか巡視であるか遠いのでよくわからなかったが、少し変な気持ちがあった。その後さらに数日たって後、同じ大学の中央にそびえた講堂の三階から飛んだ学生があつたという夕刊記事を読んで、また変な気持ちがあった。この終わりの自殺者と、前の図書館屋上の人とはおそらくなんの関係もないかもしれないが、しかし自分の頭の中では前後四人の「屋上の人」がちゃんと一つの鎖でつながれている。

おくびようもの
臆病者の常として自分もしばしば高い所から飛びおりることを想像してみることがある。乾坤一擲けんこんいつてきという言葉はこんな場合に使つてはいけないだろうが、自分にはそういう言葉が適切に思い出される。飛びおりてしまえば自分にはその建物もその所有者も、

国土も宇宙も何もかも一ぺんに永久に無くなるのだから、飛び場所の適否の問題も何もないであろうが、他の人にはやっぱり世界は残存しその建物と事件の記憶は残るであろう。

また数日たって後の雪のふる日、ある婦人がその飼っていた十姉妹じゅうしめつの四羽とも一度に死にかかったのを手のひらへのせて一生懸命火鉢ひばちで暖めていた。見ると、もう全く冷たくなつてしまっている。しかし、「たとえだめでもそうしないと気がすまない」のだという。

「人間が死んだらお経をあげると同じじやありませんか」とその人はいう。
こういう唯心論者もまだ少しはいるのである。

六

ある大学講堂の前へ突き当たって右の坂道へおりようとする曲がり角に、パレットナイフのような形の芝生がある。きちょうめんにちゃんと曲がり角を曲がってあるのと、その芝生の上を踏みにじって行くのとで、歩く距離にすれば三尺とはちがわない。しかし多くの人がその三尺の距離の歩行を節約すると見えて芝生がそこだけ踏みつぶされてかわいそうにはげている。この事を人に話したら、それは設計が悪いのだという。そんな所へ芝生をこしらえるのが間違っているとされてなるほどそれもそうかと思った。

上野竹の台の入り口に二つ並んで噴水ができた。その周囲の芝生に立ち入るなど書いた明白な立て札はあるが、事実は子供も大供も中供もやはり芝生に立ち入って水の面をのぞかなければ気が済まないのである。これもたしかに設計が悪いと言われなければならないのがいわゆる時代の推移であろう。二十年前だったら、設計も立て札も当然自明的であつて、制札を無視するのが没公徳的で悪いのであつた。

自分の郷里では、今は知らず二十年も以前は、婚礼の三々九度の杯をあげている座敷へ、

だれでもかまわず、ドヤドヤと上がり込んで、片手には泥だらけの下駄をぶら下げたまま
で、立ちはだかつて花嫁や花婿の鼻の高低目じりの角度を品評した。それを制すれば門の
扉の一枚ぐらい毀たれても苦情は言えなかった。これはむしろ一九三〇年を通り越してい
たとも考えられる。

今度法令が変わると他人の家へうつかり黙つてはいつて来るものにはピストルを向けて
ぶつ放してもいいことになるという話である。これは芝生の場合とは逆の方向への推移で
ある。もつともアフリカ内地へでも行けば、今でも、うつかり国境へ入り込んで視察でも
していたというだけでもすぐ拘禁され、場合によると命があぶない所もあるかもしれない。
これらの事実の關係ははなはだ錯綜さくそうしていて、考えても考えても、考えが隠れん坊を
して結局わからなくなるのである。時代は進むばかりであとへはもどらないはずであるが、
時代の波の位相フエーズのようなものはほぼ同じことを繰り返すのかもしれない。しかしただ繰
り返すだけではなくて、やはり何かしらあるものの積分だけは蓄積しているには相違ない。
そうしてその積分されたものの掛け値なしの正味はと言えば結局科学の収穫だけではない
かという気がする。思想や知恵などという流行物はやりものはどうもいつも一方だけへ進んでいる
とは思われない。

七

妙な夢を見た。大河の岸に建った家の楼上にいる。どういふわけかはわからないが、この自分はもう数分の後には、別室に入つて、自分からは希望しない自殺を決行しなければならぬことになっている。その座敷というのがこつちからよく見える。大きな川に臨んだ見晴らしのいいきれいな部屋^{へや}で、川向こうに見える山は郷里の記憶に親しいあの山である。だれとも知れず四五人の人々がそばにいておし黙っている。五分、三分、一分いよいよ時刻が迫つたのでずつと席を立ててその別室へはいった。その時までは死ぬことに對しては全く平氣でいたのが、そこへすわつた瞬間に急に死ぬのがいやになつた。それはちやうど大河の堤を切り放したように、生命への欲望が一度に汎^{はん}濫^{らん}した。と思うと大きな恐ろしいうなり声のようなものが聞こえて目をさました。

二三日前にある友人とガリレーやブルノやデカルトの話をした。そうして、学説と生命とを天秤^{てんびん}にかけた三人が三様の解決を論じた。その時に頭を往來した重苦しい雲のようなものの中に何かしらこういう夢を見させるものがあつたかもしれない。

ブルノは学問と宗教と生命とを切り離す事ができなかった。デカルトではこれが デイフェ 分
化 レンシエート されていたように見える。ガリレーはその二人の途中に立って悩んでいたのであ
ろう。

この夢を見た夜は寝しなに続日 しよくにほんぎ 本紀を読んだ。そうして たちばなのならまろ 橘奈良麻呂らの事件にひど
く神経を刺激された、そのせいもいくらかあったかもしれない。臆病者 おくびょうもの はよくこんな
夢を見る。

(昭和五年三月、改造)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第二巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年9月10日第1刷発行

1964（昭和39）年1月16日第22刷改版発行

1997（平成9）年5月6日第70刷発行

入力：（株）モモ

校正：かとうかおり

2003年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

LIBER STUDIORUM

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>